



栗原小だより

新座市栗原1-5-1 ☎042-473-7070

HP <https://e-kurihara-c-niiza.edumap.jp/>

～学校教育目標～
よく考え学ぶ子
心のゆたかな子
たくましい子



令和7年度1月号
令和8年1月8日

今年の干支は馬ですが、馬は出てきません。

校長 古澤 健史

【動物のひみつに驚愕】

明けまして、おめでとうございます。今年もよろしくお願ひいたします。さて、皆様は年末年始をどのように過ごされたでしょうか。私は、終業式に子どもたちに話した通り、毎日散歩をして体を動かし、冬休み中に100km以上歩くこと、普段できない家のことをすること、本を読むことを目標に過ごしました。

冬休みの読書の中で、とても面白く感心させられた1冊を紹介します。『ウォード博士の驚異の「動物行動学入門」動物のひみつ』という本です。700ページ以上あり、外見は辞書のような厚さです。この本の影響で、読もうと思ってためていた本の多くが手つかずになってしまいました。

この本の作者アシュリー・ウォードさんは、シドニー大学の「動物行動学」の教授で、アフリカから南極まで世界中を旅して、好奇心旺盛な視点とユーモアで、動物たちのさまざまな生態とその背景にある「社会性」に迫りながら、彼らの知られざる行動、自然の偉大な驚異の数々を紹介してくれます。

人は社会性の動物と言われ、会話と文字を用いてコミュニケーションを取ることができます。動物の中にも人間ほどではないが同種族間で協力して生活しているものがあります。そんな動物たちの知られざる秘密に驚かされます。

例えば、冒頭に語られる吸血コウモリの話。嫌なイメージしかないこの吸血コウモリですが、動物の血を吸うことは難しく、獲物にありつけない日も多い。4日間食事ができないと餓死してしまう中、ねぐらで獲物を捕ることができなかつた仲間に、血を吐き戻して与え、助け合うという生態があるというのです。これをお互いに行い、これまで生き延びてきたのです。

また、ナンキョクオキアミの話も驚かされました。私は、本を読むまでクジラが食

べている小さなエビくらいの知識しかありませんでした。ところが、地球上のナンキョクオキアミをすべて集めると体重は全人類の体重を超えていて、非常に素早く人間の大きさに換算すると100mを2秒で移動するのに匹敵し、クジラも実は食べるのに苦労しているそうです。そして、何より彼らが二酸化炭素を海底に運んで無力化しているというのです。こんな話が満載で、動物の凄さに驚きます。

【人間だけが他の動物からも学べる】

学校だよりの12月号に今年の漢字の予想を書きましたが、今回は上位に入った漢字となぜ選ばれたかをほぼ的中させました。その中で大熊猫（パンダ）については、見逃していました。そのパンダについて、1月5日（月）の読売新聞の編集手帳に書かれていました。その中で、開園から140年余りの上野動物園の歴史を紐解いていくと、上野動物園の動物たちが、戦争と無縁ではなかったことが書かれていました。古くは外国の王室からの贈答品として動物が贈られるだけでなく、日清戦争や日露戦争で、戦争に勝った戦利品として、フタコブラクダなどが宮内省に献上され、動物園に展示されたそうです。また、戦場で活躍した動物たちを戦功動物としてたたえることで戦意高揚に利用してきました。戦争の犠牲となつた話として一番に私が思い出したのは、子どもの頃に絵本で読んだ『かわいそなぞう』です。

戦後になると、国同士で友好や親善の証しとして、動物を贈ったり贈られたりするようになりました。日本からは、オオサンショウウオやタンチョウが海外に贈られたそうです。動物が、戦争の道具や犠牲ではなく友好の使者となりました。

上野動物園の歴史やパンダ騒動は、動物のひみつの話を読んだ後だと、思わず頭を抱えてしまします。人が、動物から学ぶことはたくさんあります。